

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 13 日現在

機関番号：32718

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370071

研究課題名(和文)近代ドイツにおける宗教思想と「読者としての大衆」の関係についての研究

研究課題名(英文)The Study on the Relationship between religious Thought and the general Public
in Modern Germany

研究代表者

深井 智朗 (Fukai, Tomoaki)

東洋英和女学院大学・人間科学部・教授

研究者番号：40306379

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、高度情報社会における宗教思想家(あるいは団体)と、それを受け取る「読者としての大衆」との関係の変化を、ドイツのヴィルヘルム期に出版社(とりわけオイゲン・ディーデリヒス出版社とクリスチャン・カイザー出版社)の歴史をサンプルに、以下の2点から考察した。その結果以下の結論を得た。すなわち、信教の自由が保障され、宗教が市場化した社会では、宗教的思想家と読者との関係が逆転し、著者が読書に影響を及ぼし、知識や宗教的情報を伝達するのではなく、「読者としての大衆」の嗜好が宗教思想家の考えを形成している。

研究成果の概要(英文)：The study shows the importance of the author - editor or publisher - read model, instead of the author - reader model, which was presupposed in the traditional intellectual history. In the intellectual life of the modern world, the market increasingly plays an important role. Hence it becomes header to disseminate one's thoughts and ideas without the mediation of editor and/ or publisher and/ or editor on author's thoughts. In order to demonstrate this, the study focuses on two modern German publishers dealing with religious subjects.

研究分野：人文学

キーワード：思想史 出版史 プロテスタンティズム

1. 研究開始当初の背景

(1) 近代以後の情報化社会における宗教と出版の関係

近代以後の情報化社会、あるいは現代のような高度情報化社会においては、宗教団体は教義や思想の伝達や伝播のために出版をはじめマスメディアとの関係を持たざるを得ない。宗教団体は特に出版事業とは、教団内部に出版事業を持つ場合でも、一般出版社と委託関係を結ぶ場合でも、深い関係を維持続けてきた。

他方で出版という視点から宗教家や宗教思想を考える場合、どれほど優れた宗教思想を持った人物であっても、近代以後の情報化社会では、出版社、あるいは編集者のプロデュースなしにはその思想を大衆に伝達することは困難となった。現実には、近代ドイツ神学を支配し続けたカール・バルトやフリードリヒ・ゴーガルテンはそのような編集者によって発見され、神学者としてデビューしたのである。それは著者と出版社の関係に大きな転換をもたらした。

しかしさらに重要なことは、出版社の成功と読書人の獲得は、著者と編集者との関係に変化をもたらしただけでなく、「読書する大衆」と著者の宗教的思想家である著者の関係にも変化をもたらし、両者の関係の逆転、あるいは大衆の嗜好に強く影響を受ける思想家が登場した可能性である。

これまで申請者は、ガンゴルフ・ヒュービンガーやアルフ・クリストファーセンとの学際的な研究の中で、宗教思想のプロデューサーとしての編集者や出版社が擬似宗教としての社会的機能を果たすようになる歴史プロセスを資料に基づいて解明してきたが、さらにすすんで宗教思想家に直接影響を与える「読者としての大衆」についての関係の資料に基づく研究が必要である。

(2) 着想の経緯

申請者は、平成 23 年度～25 年度の基盤研究(C)に基づく研究において、ヴィルヘルム期とヴァイマル期の宗教的思想家と出版社の関係を、「編集者の思想」という視点から研究し、それを『思想としての編集者 - 近代ドイツ・プロテスタンティズムと出版史』(2011 年、教文館)、『ヴァイマルの聖なる政治的精神』(2012 年、岩波書店)などにまとめた。

この度の研究では、これまでの研究から得た結論である「宗教のテキストの背後には、それを生み出した社会史的なコンテキストが存在しており、逆に社会的なコンテキストが宗教的テキストを生み出す」という命題、「編集者の思想は、著者の思想を内包し、あるいは著者の思想は編集者という知的枠組みを通して市場に提供される」という命題をさらに展開するために、この時代の宗教の社会的機能の解明を、受け取り手としての「読者としての大衆」という視点から考察するこ

とで、これまでの一連の研究をさらに発展させ、完成させたい。それは、信教の自由が保障され、信仰が自由化された近代社会では宗教は市場化されたのであるが、そのによって「読者としての大衆」が思想の形成者である著者に与える影響の研究であり、それはこれまでには試みられていない「宗教思想史」研究の新しい視点である。

2. 研究の目的

本研究では、高度情報社会における宗教思想家(あるいは団体)と、それを受け取る「読者としての大衆」との関係の変化を、ドイツのヴィルヘルム期に誕生した二つの出版社、すなわちオイゲン・ディーデリヒス出版社とクリスチャン・カイザー出版社の歴史をサンプルに、以下の2点から考察する。(1) 信教の自由が保障され、宗教が市場化した社会では、宗教的思想家と読者との関係が逆転し、著者が読書に影響を及ぼし、知識や宗教的情報を伝達するのではなく、「読者としての大衆」の嗜好が宗教思想家の考えを形成している可能性がある。(2) 著者に対して「読者としての大衆」がどのような影響を与えているのかを、市場原理という視点から検討し、宗教思想を「読者」や「大衆」の側から解明する視点を研究方法論として確立する。

そのために以下の4点を研究する。

(1) 思想家の宗教的テキストへの「読者としての大衆」の影響を具体的に検討するために、オンゲン・ディーデリヒス出版社とクリスチャン・カイザー出版社に残されている、出版企画書、帳簿、市場調査、読者アンケートなどを調査する。一次資料は幸いにしてその多くをフランクフルト大学図書館、ミュンヘン大学図書館、その他の文書資料館や各出版社に保存されており、未公開・未出版のものも含めて閲覧が可能であること、また閲覧の許可を得ているので、一次資料(手紙、議事録、帳簿、取材メモ、校正ゲラ等)に基づいて、思想家のテキストへの読者や大衆の影響を分析、解明する。

(2) 他方で両社が発見し、プロデュースし、思想界にデビューさせた宗教思想家(K・バルト、F・ゴーガルテン等)彼らが買い取り、資金援助をした雑誌や集団(Tat 誌や Zwischen den Zeiten 誌)等を、販売するために出版社や編集者が行った「宣伝」の仕組みを解明する。

(3) 読者としての大衆が著者自身の思想に及ぼす影響力を「市場原理」の視点から考察する。

(4) 両社の影響史を社会史的、また宗教学的な視点から明らかにする。すなわち(a) 高度なマスメディアが発展した社会では、大衆は宗教的作家にどのような影響を与えるのか。(b) 宗教思想家(あるいは団体)が読者としての大衆の影響を受けていると資料に基づいて断定することができるという場合、「読者としての大衆」の「意図せざる

宗教思想」を引き出すことができるのか。(c)「読者としての大衆」は「疑似宗教」、あるいは「宗教思想」の担い手と言い得るのかという問題。

3. 研究の方法

本研究では、近代以後の情報化した社会における宗教的思想家と「読者としての大衆」の関係を具体的に解明するために、ヴィルヘルム期に登場したオイゲン・ディーデリヒス出版社とクリスチャン・カイザー出版社という二つの歴史的サンプルを取り扱う。研究方法としては、(1)一次資料の収集と統計的な分析、(2)思想的テキストの宗教学的、また政治的解釈を行う。

オイゲン・ディーデリヒス出版社を平成26年度に取り扱い、クリスチャン・カイザー出版社を平成27年度に取り扱った。各年度とも資料の収集と分析にその重点が置かれる。さらに平成28年度に比較と、まとめ、また研究成果の公開の準備を行った。

4. 研究成果

本研究によって、

(1)宗教的思想家と読者としての大衆の関係は、近代以後の情報化した社会においては著者側に主導権があったり、対等であるのではなく、むしろ「読者としての大衆」の側が宗教思想にまで影響を与えることになった状況が明らかになった。それは宗教思想における「市場原理」の影響の問題である。

(2)本研究ではさらに「読者としての大衆という宗教」のような疑似宗教が近代以後の社会には存在していることを歴史的事例をとおして明らかにした。これが本研究の学術的命題である。

(3)さらに本研究の結論として、現代の高度に情報化した社会における宗教とメディアの関係という今日さまざまな視点から言及される問題について以下のような命題を提示した。

命題1「読者としての大衆」の宗教意識
宗教思想家(宗教団体)

命題2「著者 宗教団体 読者」構造
宗教の市場化 「読者 編集者 著者」構造

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計19件)

深井智朗、1517年から1617年へ 宗教改革百年はどう祝われたか、未来、587号、2017、8-13

深井智朗、シュライアマハーの幼児教育論 教育思想史的考察、保育子ども年報、2016年度版、2016、41-58

深井智朗、亡命後のエーリヒ・フロムとパウル・ティリヒ「民主的なドイツのた

めの協議会」をめぐって、東洋英和大学大学院紀要、13巻、2017、65-80

深井智朗、ヴィルヘルム期ドイツの「コメニウス協会」とオイゲン・ディーデリヒス出版社、東洋英和女学院大学教職課程研究論集、8巻、2016、2-14

深井智朗、宗教改革を記念するとは、キリスト教書総目録2017年度版、28巻、2016、iii-viii

深井智朗、ヒラリー・クリントンを慰めたティリヒの説教、図書、809号、2016、20-24

深井智朗、エルンスト・トレルチの神学的あり、政治的遺産、東北学院大学キリスト教文化研究所紀要、34巻、2016、21-38

深井智朗、弱い神の系譜 文学的構想力と神学、キリスト教文学研究、33巻、2016、1-13

深井智朗、慰められない悲しみ ゲルシヨム・ショーレムとパウル・ティリヒ往復書簡(3) 未来、583号、2016、26-32

深井智朗、慰められない悲しみ ゲルシヨム・ショーレムとパウル・ティリヒ往復書簡(2) 未来、582号、2015、26-32

深井智朗、慰められない悲しみ ゲルシヨム・ショーレムとパウル・ティリヒ往復書簡(1) 未来、581号、2015、26-32

深井智朗、ゲッティンゲン時代のカール・バルト、金城学院大学論叢 人文科学篇、12号、2015、58-73

深井智朗、未見で未完の友情 エルンスト・カッシーラーとパウル・ティリヒの間で交わされた未見の二つの書簡、思想、1098号、2015、116-141

深井智朗、パウル・ティリヒの遺稿政策、金城学院大学論叢、人文科学篇、11巻、2015、95-114

深井智朗、1920年代の神学にあって実存思想、30号、2015、5-30

深井智朗、「知識人の政治的責任という問題についてさらに議論を続ける必要を感じています……」1960年のパウル・ティリヒと丸山真男、未来、577号、2015、8-14

深井智朗、宗教教育からみたドイツの宗教多元主義、ドイツ研究、49巻、2015、172-179

深井智朗、神学研究と市場、日本の神学、54巻、2015、207-213

深井智朗、W・リップマンの『公共哲学』とP・ティリヒの『組織神学』をつなぐ回路、宗教研究、382号、2015、1-24

〔学会発表〕(計1件)

深井智朗、エルンスト・トレルチの政治的・神学的遺産、日本基督教学会東北支部、2015年5月20日、東北学院大学(宮

城県仙台市)

〔図書〕(計2件)

深井智朗、中央公論新社、プロテスタン
ティズム 宗教改革から現代政治まで、
2017、221

深井智朗、岩波書店、パウル・ティリヒ、
2016、287

6. 研究組織

(1) 研究代表者

深井智朗 (FUKAI, Tomoaki)

東洋英和女学院大学・人間科学部・教授

研究者番号：40306379